研究推進委員会フォーラム

風景計画研究・事例報告会

企画責任者：古谷勝則　千葉大学　伊藤　弘　筑波大学　上田裕文　北海道大学　松島　肇　北海道大学
山本清龍　岩手大学　温井　亨　東北公益文科大学　入江彰昭　東京農業大学　寺田　徹　東京大学
小林昭裕　専修大学　水内佑輔　東京大学　村上修一　滋賀県立大学　武田重昭　大阪府立大学
渡辺貴史　長崎大学　田中伸彦　東海大学　松井孝子　プレック研究所　高山範理　森林総合研究所

1．趣旨

前回の「風景計画研究・事例報告会」では，従来実像を中心に策定されてきた風景計画を考えるに当たり，今後は実像と情報を結び付ける作業が求められることが示され，「ランドスケープリテラシー」の必要性が確認された。昨年度の報告会での議論を踏まえ，今回の報告会における話題提供では，電子機器やインターネット・UAV 等で獲得し多くの人達が共有する情報と風景の関係や，八景選定およびガイドラインの作成・合意形成・現場での情報提供といった見る人への意識づけとそれによってもたらされる実像の認識，風景という無体物（有形的存在を有しないもの）を施策の中でどう取り扱うべきかといった内容が示された。

2．話題提供

全球環境知覚基盤　Sense of Globe 2072　斎藤　馨

今まで作成されてきたシーン景観把握モデルや，眺望景観と囲繞景観を要素とする考え方は，here と there およびその関係によって構成されている。電子機器やインターネットの普及によってそれらは切り分けられずにインターネット上に存在している。実像がなくとも，情報によって there や眺望景観は獲得され，イメージが形成される。インターネットにおいて here と there は，情報の受発信行為によって分けられる。there は共有され here は拡張され，時空間を越えてだれもが環境知覚を共有すると考えている。この基盤となる知覚が sense of globe であり，実証実験プロジェクトであるサイバーフォレストで人気の高いライブ音配信では，音に対する書き込みがインターネット上で展開され，here の延長として全球を身近に感じることができるようになっていると思われる。1872 年に国立公園が，1972 年に世界遺産が誕生し，2072 年には第三の認証が，想像を超えたインフラ整備に伴って，アジアや日本から誕生すると期待している。

UAV を用いた写真測量による松田城址の再現に関する研究　國井洋一ら

UAV（Unmanned Aerial Vehicle：無人航空機）によって，現存する関連資料が少なく，私有地内にあり立入が困難な松田城址の 3D モデルを，地表 60～70 m地点から撮影された写真 947 枚による写真測量から作成した。東海自動車道（現在の東名高速道路）拡幅工事によって欠損された箇所も，当時の等高線図を利用することで再現することができ，2D 情報よりも地形や建造物の形状把握が容易になった。こうして作成された松田城址の 3D モデルは，歴史調査実施に当たっての遺構の位置関係把握などで有用な資料になる。

「吉沢八景選定プロジェクト」が都市近郊の里地里山地域における風景づくりにもたらした効果　小島周作

都市近郊の里地里山地域である平塚市吉沢地区における，「八景の選定」による効果をプロジェクトの段階ごとにみた。応募段階では，対象地区の景観を，各々の評価基準で見つめ直す機会が与えられた。選定段階では，土地利用の異なる４自治会区からそれぞれ八景を選定し，全体の一体感を高めさせた。公表段階では，吉沢地区に対して，地区に対する愛着や評価が高まっていた。これは，小学校区という狭い範囲で多くの意見を尊重して選定した結果と考えられ，これにより地区全体の目標像が明らかになったといえる。

風力発電施設の景観印象評価と環境アセス　松島　肇ら

風力発電の設置にあたっては，景観や環境への悪影響が懸念されている。その影響をめぐる事業者と住民・環境保護団体との間で起こる紛争リスクについて，住民にアンケートを実施したところ，風力発電施設に関する知識や情報，環境紛争経験の有無が評価と関係していることがうかがえた。景観紛争リスクを軽減させるためには，立地選定段階での住民への適切な情報提供と合意形成や，建設・運用段階での市民への便益還元システムの導入などが考えられる。

名勝における眺望と風景計画　温井　亨

山形県鶴岡市金峯山（名勝指定）では，指定範囲が視点およびその周囲となっており，視対象を守るようにはなっていない。名勝ではこのような傾向が強く，その理由として，風景・景観は無体物（有形的存在を有しない）であり，対象を特定できないことがあげられる。実際には，有体物の「景観地」が指定や計画の対象になっている。今後，無体物である風景の計画の可能性を検討していくべきである。

地形に即した灌漑の有様を体験する設えの現状と課題　村上修一

地形に即した重力灌漑によって支えられてきている国内の稲作景観において，その中心である幹線水路の歩行により，当地における自然と人の関わりを理解することが期待される。現在，既に整備が進められている「水土里の路ウォーキング」での水路の位置づけと情報提供をみると，水路と受益地の全体像の把握や灌漑と地形の関係が充分理解できるようにはなっていない。受益地を網羅するコース設定と，景観を踏まえた情報提供が必要である。

地方中核都市における景観まちづくりガイドラインの策定過程と運用実態　渡辺貴史氏ら

長崎県長崎市深堀地区では，体制構築期・検討期・策定期を経て景観ガイドラインが策定された。いずれの時期においても，住民の理解促進と普及啓発が行われ，策定されたガイドラインも具体的かつ規範を図示できるようなものとした。公的行為においてはガイドラインが遵守されることが多いものの，私的行為では少ない。今後は，ガイドライン策定過程での住民の取組や意識の相違と運用実態を整理し，その結果を踏まえたガイドライン策定と運用方法の検討が挙げられる。

3．まとめ

風景の共有を図ることが，計画策定（視点場の整備・視対象の整備・距離や体験など視点と視対象の関係の構築）や，それによって生成された結果としての像においてもまだできているとはいいがたく，そのためのツールとして UAV なども考えられる。

（文責：伊藤　弘）